

ニュージーランド 酪農生産現場の事例紹介

No. 3

ニュージーランド（NZ）の酪農生産現場の事例からいくつかをご紹介します。
皆様の農場現場改善のヒントとなれば幸いです。

放牧地出入り用ステップ



写真の電牧柵は高さ約1.5m、ワイヤーも7段張りのため、そのままの状態では作業者の出入りが不可能です。柵が高いため、複数箇所へのゲート設置も現実的ではありません。

高さの異なる木製のステップを、ワイヤーの間を縫って交差させて設置すると、比較的楽に出入りが可能となります。ステップ表面は鉄製金具で滑り止め加工を施しています。

ただし、慎重に上り下りしないと、体ごと地面に落ちたりワイヤーに引っかかる心配はありますが…。

ミルクパーラー戻り通路への削蹄枠設置



日々長い距離の牧道を移動するNZの牛にとって、蹄病や蹄の異常への迅速な対処は不可欠です。

写真のパーラーでは、戻り通路のゲート設置を工夫し、搾乳後に特定の牛を戻り通路で分離し、通路そばに設置した削蹄枠へ追い込むことができます。

軽度な蹄病牛の治療が可能な他、投薬なども容易に行えます。終了後は、枠前側のゲートを開けばそのまま牛群や別の場所へ誘導できます。

スイングパーラー



NZの乳価制度は全固形分量（Milk Solid）が基準で、乳量よりも乳成分を重視した家畜改良を行っています。1頭当たり搾乳時間が短く、季節繁殖中心のため乾乳期間の搾乳作業はありません。

そのため、パーラー中央にユニットをぶら下げて左右両側で共有する「スイングパーラー」が多く採用されています。

写真のパーラーは25頭ダブルですが、ユニットは50台ではなく25台と、初期投資額、ランニングコストともに安く抑えられます。もちろん、通常タイプのダブルのパーラーや、ロータリーパーラーも多く稼働しています。

ロータリーパーラーでの発情発見



ペイント確認用鏡（赤丸内）

発情発見率の向上と作業の効率化のため、テイルペイントが多く利用されています。写真のロータリーパーラーでは、作業者がパーラー上方に取り付けた鏡（赤丸内）を見て、発情の有無を確認しています。

搾乳と併行して行うため、実際にはかなり大変そうに感じられますが、季節繁殖では1回の発情見逃しが大きな損失となるため、あらゆる機会を逃さず作業を組み立てています。

ほ育牛の管理



草架



水槽(緑)、飼槽(白)



群飼用ほ乳器



群飼用開放式ほ育舎



放牧地で分娩後、初乳を強制投与

子牛は放牧地で出生後すぐに、カテーテルで初乳を強制投与（右下）後、換気が良く敷料がふんだんに入ったほ育舎（中央）で、各ペン数頭からの群飼いとなります。ほ乳も群飼用ほ乳器（左下）で行います。

放牧主体でも、新鮮な水を供給する水槽、スターターを与える飼槽、乾草が飽食可能な草架が各ペンに設置されており、ほ育期の重要部分が担保されています。

国・地域が変われば、仕事の進め方、ものの考え方、風習などが大きく異なります。我々にとっては大雑把に感じる部分もありますが、科学的に裏打ちされた放牧技術と、労働生産性を追求する姿勢は学ぶべきところが多くあります。

これらの写真や資料に興味のある方は、普及センターまでお気軽にご一報ください。